

# 一九六六年の幼児教育界を迎えて

——年頭に思うこと——

大 熊 米 子



新しく迎える一九六六年に、あれこれ理想を思い描くことは心楽しいことである。一九六六年に抱負を持つことは、責任の重大さを、つくづく思い知らされることである。そして、一九六六年の現実、殊に厳しいものであると思われる。

しかし、その理想と抱負がどんなに大きいものであろうと、屈することなく日日の現実の上に、少しずつ消化し、まじめに活かそうと努力することこそ、私たちに課せられた一九六六年の仕事である。

先ず年頭に思うこと。

私ども幼児の教育に携わる者は、もう一度、意識して子どもを見つめ直すところから出発したいと思う。極言すれば、子どもにも還

れ”とか“再びこどもに!!”とでもいうスローガンを掲げたいような気持ちなのである。今年こそは、素朴で自然なこどもと、第一歩から一緒に歩きだしたいのである。

幼稚園の教育が、学校教育の一環となつてすでに十九年になる。又昭和三九年には新教育要領が施行された。それに、ここ数年ほど、幼児教育があらゆる方向からのスポットライトを浴びていることは、かつてないほどのことである。このような状態で、全く、幼児教育の態勢は万全と思えるのである。

一方、自覚した幼児教育者たちは、日夜真摯に研究に研究を重ねている。そうした今こそ、その研究が、本当にこどものためになるものであるかを、もう一度出発点のこどものところに帰って思い返すのは意味のないことではないと思う。新しい年を本当に有意義に

過すために、そして、この年も本当によい仕事をするために。

過去の幼児教育の研究は、幼児の発達や、心理にそって、どちらかといえば総合的に進められてきたのに対して、近時は、分化的というか分析的というか、比較的狭い部分を揃えて、細かく奥深く研究するのが常のようになった。別のいい方をすれば、科学的に専門的になってきたようである。それは領域というものができたことにもよるのであるが、無論領域が悪いというわけではないし、領域別に勉強することは正しいことである。専門的に深く究めるのも大切なことであると思う。

ただ、その専門的な知識は、あくまでも大人のものであり、領域別の研究は教師の勉強方法であるはずである。重ねていうと、領域というのは、大人の勉強の便宜のために考えられた区分であると思う。私たちは、専門的に研究して得たものを、自分のものとして自分の中に蓄積し、よく咀嚼、消化してから、こどもに与えるべきものだと思うのである。もっと端的に言えば、幼稚園の（リズム）は舞踊そのものではない。幼児の絵は絵画そのものではない。そうあってはならないのである。我われは童話の先生でも音楽の先生でもない、幼稚園の先生なのである。

又もう一つ、こどもの所に帰って考え直したいものがある。二年なり、三年なり、こどもが在籍している間に、幼稚園において経験

させたいことの計画がそれである。（教育課程といえれば早いのかもされないが、その言葉をあからさまにださない方が気持ちとして近いような気がする……）無論、教育であるからには、そこに綿密な計画がなければならぬことは論を俟たない。しかし、幼稚園の領域が、小学校の教科とは違うのと全く同じわけで、幼稚園の教育計画が、小学校のそれとは、編成方法も使い方も違うのは当然のことである。

このこどもたちが、この園にいる間に経験させたいことがたくさんあるはずであるが、それを、こどもの発達段階に合わせて、時期を選んで割りふる、そうして年間の計画がたつ、次いで季節の計画になる……そこまではよいのであるが、その後の扱いである。年間計画を十二に切って一か月の計画、それを四つか五つに切って一週間の、又それを六つにわけて一日の計画が立つとすることはないだろうか。あるとすれば、それは余りにも策が無いような気がするのである。その場合、立案者である教師の頭には、紙に描いた動かない子どもの姿はあるにしても、自分のクラスの、生きた子どもたちは、どこに忘れてきてしまったのだろうか。

いや、その子どもたちは、空から計画が降ってくるのを待って遊びだすだろうか？果して計画を待っているだろうか……又、今こうして遊んでいるこの子には、今このことを経験させたい、ああ、こ

の子にはこれをしつけない……という場合にはどうすればよいのだろう。既定の緻密な一日の計画は、果して邪魔にはならないだろうか？ そのように考え進めてみると、幼稚園の教育課程はもっと融通性を持った、個々の子どもに即したものでなければいけないのである。子どもが主役でなければどんな計画も息が通わないのである。

幼稚園の教育課程は、子どもと教師と、協力して作るものではないだろうか？

在園中の計画、年間の計画、ができれば、それを教師はしっかりと記憶するのである。心にたたみ込むのである。(もちろん記録はしておくべきであろう) しかも、それは、いつ何時でも、引き出しをあげるように再現できなければいけないのである。そして、自分と子どもたちの生活の場において、その計画を個々の子どもたちの一番適切な時期に活用する。それでこそ計画が活きるのではないだろうか。今日の活きた生活は、明日の素晴らしい生活をよぶのである。そうしてこそ、教師の計画は適時適所で展開し、花と開くであろう。

年頭に当って、もう一つ、切に思うことは、子どもも、教師も、父母も、そして日本の国が、今年は皆幸せになって欲しいということである。

幼稚園に入りたくても入れない、遊び場がなくて危険な場所遊で

んでいる子どもたち、又、多忙の故で、家庭で当然しつめるべきことをしつめることができず、悩んでいる親たち、目のとどかないほどの多人数の子どもを受持って、あるいは事務的な仕事をさばききれないほど抱えて、自分自身の勉強も、自分の仕事に対する評価もできず悲しんでいる教師たち……これらを皆、政治の貧困に帰してしまうことは簡単であろう。しかし、自分たちの国の、自分たちの子どものこと、あるいは自分たち自身のことを、お互いのせいにかけて済むことではないように思える。形の上で片がついたとしても悲しむ心は片がつかないではないか、皆の貧しさ、皆の不幸は、皆の力で、少しずつでも幸せの道に近づいていかなければならぬ。

一九六六年の年頭に、これを願っても、それが今年中にすべてが達成できない現実であろうことはよくわかる。

多分今年も、来年も、あるいは来る年も来る年も続く課題であるかもしれない。だからこそ、私たちの歩みは、一筋の、永遠の道なのだと思う。考えつつ、悩みつつ、しかし明るい明日の日を信じて真摯の歩みを、手を取り合って進みたいものである。幼児教育が、本当に幼児の教育にのみ邁進できる日を信じて……